

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 17 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：平成 22 年度～平成 24 年度

課題番号：22520329

研究課題名（和文）イルゼ・アイヒンガーにおける言語実験的手法の研究

研究課題名（英文）Research into the Lingua-Experimental Methods of Ilse Aichinger

研究代表者 眞道 杉

(SHINDO SUGI)

日本大学国際関係学部・助教

研究者番号：60508729

研究成果の概要(和文):オーストリア人作家イルゼ・アイヒンガーの作品における文学手法を、インターメディア性、イギリスとの関連性、死というテーマの扱い方において研究した。アイヒンガー生誕 90 年の 2011 年にマルバツハ、ロンドン、東京において研究者を招きシンポジウムを開き、その成果を 2 冊の論集にまとめることができた。ヨーロッパで同時に進められた複数のアイヒンガー研究プロジェクトとともに、アイヒンガー研究の広がりにも貢献することができた。

研究成果の概要（英文）：I concentrated my research on the literary techniques in expression and stylistics found in the works of Austrian born author Ilse Aichinger in regard to their intermedia characteristics, their relevance to England and the handling of death and dying. Scholars and researchers were invited to participate in symposiums held in the year 2011 in Marbach, London and Tokyo, commemorating the 90<sup>th</sup> anniversary of her birth, and the outcomes of those symposiums were summarized and published in two journals.

In collaboration with numerous Aichinger research projects proceeding simultaneously in Europe, a contribution to the spread of “Aichinger Research” could thus be achieved.

交付決定額

(金額単位：円)

|          | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|----------|-----------|---------|-----------|
| 平成 22 年度 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |
| 平成 23 年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 平成 24 年度 | 600,000   | 180,000 | 780,000   |
| 年度       |           |         |           |
| 年度       |           |         |           |
| 総計       | 2,900,000 | 870,000 | 3,770,000 |

研究分野：ヨーロッパ文学（英文学を除く）

科研費の分科・細目：ドイツ語圏文学

キーワード：イルゼ・アイヒンガー、オーストリア文学、メディア、オーストリアとイギリス

## 1. 研究開始当初の背景

アイヒンガー（1921-）は、第二次世界大戦後間もなく作家活動をはじめ、2006年に至るまで60年にわたって作家活動を続けた。その作品はカフカ賞やオーストリア大賞など高い評価を受けているにも関わらず、その難解さから研究があまり進んでいなかった。また、60年にわたっての作家活動は文学史においても正当な評価がなされているとは言えなかった。戦後ドイツ文学のカノンにおいて、マージナルな位置に追いやられた背景には、アイヒンガー文学が、ユダヤ性（アイヒンガーの母方はユダヤ系であり、親族はホロコーストの犠牲になっている。）、女性文学、と言った文学のカノンに収まりきれない広がりを持ち、受容側がアイヒンガー文学を捉えきれない現状もあった。

## 2. 研究の目的

本研究は、前述の状況に対し、2010年に独文学会で行ったシンポジウムにおいて、問題を提起し、アイヒンガー文学の特性を探り、その評価に新たな光を当る必要性を確認した。その後、研究者たちは研究会を重ね、アイヒンガー文学を理解するには、従来のカノンに捉われない新しい視座が必要であるとの考えに至った。そこで、本研究ではアイヒンガー文学が持つ文学手法の多様性、実験性に光を当て、研究をしてゆくことにした。

## 3. 研究の方法

本課題におけるアプローチは主に以下の3つの視点からである。

- (1) アイヒンガー文学におけるインターメディア性：  
アイヒンガーは、小説や詩と並んでラジオ劇や映画と想起を扱ったテキスト群や写真・絵画とコラボレーションした文章などを書いているが、それまでインターメディアという視点では研究がなされてこなかった。このような実験的な手法を、インターメディアなテキストとして読み直す試みをする。
- (2) アイヒンガー文学と英国：  
アイヒンガーの双子の妹は第二次世界大戦が勃発する直前にイギリスへ渡って、現在までロンドンに

在住している。双子の妹との別離、英国への関心、英語そして英文学のアイヒンガー文学における影響関係についても、それまであまり研究テーマとはされてこなかったが、アイヒンガー文学の特性を探る上では重要な要素であるため、本研究で扱った。

### (3) 死の扱い方：

1946年に作家活動を始めたアイヒンガーは、デビュー当初戦後のドイツ語圏文学において新しい風を運んだと評されたが、ドイツ語圏文学において、第二次世界大戦を境とする文学の断絶は、戦後文学を理解するうえで欠かせない要素である。その断絶と並行して、オーストリア文学における死というテーマは、戦前戦後を通じ、その特性またその変容を検証するうえで一つの要となるテーマである。死の捉え方は、同じドイツ語圏であってもプロテスタントが主流のドイツとカトリックが主流のオーストリアでは違っており、その相違は文学上の特性にも大きな影響を与えている。そのオーストリア的な特性に光を当てて、他のオーストリア人作家との比較を通じて、アイヒンガー文学の特性を探る。

以上の3つのテーマを、次のような方法で研究した。

- (1) 初年度は月に数回の研究会：  
ここで意見交換及びシンポジウムの準備を行った。
- (2) マールバッハにおける一次資料調査：  
マールバッハにあるドイツ文学資料館（DLA）には、アイヒンガーの手稿、日記、写真資料などの一次資料が保管されている。その一時資料の研究により、作品の成立背景や文学手法を探った。
- (3) ウィーンにおける資料調査及び研究協力者との意見交換：  
ウィーンのLiteraturhaus（現代文学資料館）には現代のオーストリア作家の資料が収められている。その資料調査と、研究協力者（Dr. Martin Kubaczek, Dr. Peter Waterhouse）との研究打ち合わせ及び意見交換をし

た。

- (4) 3回のシンポジウムにおける研究発表及び研究者との意見交換：  
本研究期間中、2011年3月にマールバッハのDLAとロンドンのオーストリア大使館において、また同年11月に東京の日本大学文理学部において、上記の3つのテーマをそれぞれ主に取り上げたシンポジウムを行い、研究発表及び意見交換をおこなった。

#### 4. 研究成果

上記の3つの研究アプローチについて、主に以下のような研究成果があった。

(1) アイヒンガーのメディア性：

主にマールバッハのDLAにおける資料調査をもとに、2011年3月にDLAにおいて、ドイツ、オーストリア、アメリカ、日本から研究者12名(Dr. Barbara Agnese, Prof. Roland Berbig, Prof. Klaus Briegleb, Dr. Reika Hane, Prof. Christine Ivanovic, Prof. Annegret Pelz, Dr. Ingeborg Rabenstein-Michel, Dr. Ruth Vogel-Klein, Prof. Elisabeth Weber, Dr. Thomas Wild, Hans Zischler, Ass. Prof. Sugi Shindo)が集まり、シンポジウム“Aichingers Medien“を開いた。シンポジウムには、アイヒンガーの娘であるミリアム・アイヒさん、アイヒンガーの双子の妹の娘さんルート・リックスさんにも参加してもらうことができた。

同時にDLAに保管されている、アイヒンガーと戦争直前にロンドンに渡った双子の妹ヘルガとの戦時中の往復書簡の朗読会においてアイヒさん、リックスさんにそれぞれの母親の書簡を読んでいただいた。

60年にわたる作家活動において、アイヒンガーの作品が年を追うごとに簡潔かつ短くなってきていることについては、従来から指摘があったが、文体が簡潔になるにつれて、特に後期の作品においては、文学以外のメディア(写真、映画など)の要素が作品成立に深く係ってきている。それは、文学と一体になり、時には文学を補完する役割を果たしている。画像そのものを文章と対峙させたり、映画の記述を文章に取り入れることにより、記憶、

イメージの飛躍をすぐれた形で表現していることが分かった。

また、他のメディアで行っているイメージの飛躍は、文章を分析してみると形は違えど同様の仕組みで表現されていることが分かった。それをシンポジウムでは、躓きの石(Stolpersteine)と表現したが、読者を立ち止まらせ、そこからイメージの飛躍を可能にする文学手法である。

このシンポジウムの結果は、アイヒンガーの生誕90年に合わせて、Stauffenburg出版から論集として刊行することができた。また、この論集には、研究協力者である、Prof. Ruth Vogel-Kleinが見つけた、アイヒンガーの幻のラジオエッセイと言われていた「ゲオルグ・トラークル」の原稿を掲載することができた。

(2) アイヒンガーと英国：

2011年3月に在ロンドン・オーストリア大使館とProf. Görner(クイーンメリー大学)の協力により、オーストリア大使館文化フォーラムにおいてシンポジウムを開き、9名(Prof. Nobert Bachleitner, Dr. Birgit Erdle, Prof. Rüdiger Görner, Ass. Prof. Wolfgang Görtschacher, Dr. Nicola Herweg, Prof. Christine Ivanovic, Prof. Vivian Liska, Prof. David Malcolm, Ass. Prof. Sugi Shindo)の研究者の発表によるシンポジウム“Aichinger in England“を開いた。また、マールバッハで行った書簡の朗読も再度実現した。

シンポジウムでは、アイヒンガー文学における英国モチーフ、英文学の影響、ヘルガの絵画や詩とアイヒンガーの作品との影響関係について、論じられた。

英国のドイツ文学研究においても、それまであまり取り上げられてこなかった「オーストリアカルチャーセンター」の活動及びその影響について、今後の研究課題として重要であることが本シンポジウムで確認された。

このシンポジウムの論集は(1)の論集と同様に2011年11月のアイヒンガー生誕90年に合わせて発行することができた。

その論集の中で、シンポジウムの成果と並んで、アイヒンガーの双子の妹、ヘルガ・ミッキーの娘である、ルート・リックスの回想録とオーストリア作家ペーター・ウォーターハウスの寄稿を載せることができた。リックスの回想録では、第二次世界大戦中及び戦後のアイヒンガーとヘルガをめぐる家族の状況だけでなく、ヘルガと同様にロンドンに亡命してきたオーストリア人の中で「オーストリアカルチャーセンター」を中心に、密な文化活動があったことが明らかになった。また、アイヒンガーのラジオ劇「ボタン」のモチーフになったボタン工場が、亡命オーストリア人によって設立され、芸術性の高いボタンを製造していたBimini社であったことなど、これまでのアイヒンガー研究においては、全く言及されてこなかった事実も明らかになった。

(3) 死の扱い方：

2011年11月にアイヒンガー生誕90年のオマージュとして、在日オーストリア大使館及びオーストリア文学学会、初見基氏の科研費研究、及び日本大学ドイツ文学研究室のご協力をいただき、日本大学文理学部でシンポジウム“Sterensarten der/in der österreichischen Lieteratur “を開き、15名の研究者 (Prof. Hans Höller, Dr. Wakiko Kobayashi, Prof. Yoshihiko Hirano, Dr. Martin Kubaczek, Ass. Prof. Shinichi Suzuki, Dr. Asako Fukuoka, Prof. Nobuo Ikeda, Dr. Reika Hane, Ass. Prof. Kotaro Isozaki, Prof. Motoi Hatumi, Prof. Christine, Ivanovic, Ass. Prof. Hiroshi Yamamoto, Prof. Christoph Leitgeb, Prof. Itaru Terao, Prof. Kazuo Hosaka) による発表を行った。このシンポジウムにおいては、アイヒンガーを軸にオーストリア文学における死というテーマに光を当て、ドイツ語圏文学のなかのオーストリア文学の特性を探るとともに、オーストリア文学史におけるアイヒンガーの位置付けを試みた。

このシンポジウムの成果は2013年にStauffenburg 出版社から刊行予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

1. Shindo, Sugi: Übersetz mich über das Meer. „Die größere Hoffnung“ aus Japanisch. (Internationales Archiv für Sozialgeschichte der deutschen Lieteratur 2012, Bd. 37 Heft 1. S.179-189.)  
DOI 10.1515/iasl-2012-0015

[学会発表] (計6件)

1. Ivanovic, Christine: Beckett ins Österreichische gewendet. (Sterbensarten der/in der österreichischen Literatur. (2011115) 日本大学文理学部)
2. Shindo, Sugi: Trotzdem Nein zum Leben sagen. Ilse Aichinger über viktor Frankl und Emil Cioran. (Sterbensarten der/in der österreichischen Literatur. (2011113) 日本大学文理学部)
3. Ivanovic, Christine: Nach England! Zur Geschichte einer Sehnsucht. (Ilse Aichinger in England. (20110310) 在ロンドン オーストリア大使館 文化フォーラム, イギリス)
4. Shindo, Sugi: Gegenreflexionen in den Werken von Ilse Aichinger und Helga Michie. (Ilse Aichinger in England. (20110311) 在ロンドン オーストリア大使館 文化フォーラム, イギリス)
5. Ivanovic, Christine: Medien, Masse, Mensch. Ilse Aichingers bioskopisches Schreiben. (Aichingers Medien. (20110304) Deutsches Literaturarchiv Marbach ドイツ)
6. Shindo, Sugi: Motive als Medium. Analyse zur subtextuellen Konstruktion von Aichingers Texten. (Aichingers Medien. (20110303) Deutsches Literaturarchiv Marbach ドイツ)

[図書] (計2件)

1. Christine Ivanovic und Sugi Shindo (Hrsg.): Absprung zur Weiterbesinnung. Geschichte und Medien bei Ilse Aichinger. Mit der Erstveröffentlichung des Radio-Essays Georg Trakl von Ilse Aichinger. (Staffenbug, 2011, 233p)
2. Rüdiger Görner, Christine Ivanovic und Sugi Shindo (Hrsg.): Wort Anker Werfen. Ilse Aichinger und England. (Königshausen & Neumann, 2011, 163p)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

眞道 杉 (SHINDO SUGI)  
日本大学国際関係学部 助教  
研究者番号：60508729

(2) 研究分担者 (2011年9月まで)

イヴァノビッチ・クリスティーネ  
(IVANOVIC CHRISTINE)  
東京大学大学院人本社会系研究科  
客員教授  
研究者番号：70376523